

< 2004年6月 >

『兵は凶器なり』(24) 15年戦争と新聞メディア

- 1926 - 1935 -

『日米戦えば日本は必ず敗れる』 - 水野広徳の反戦平和思想

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

戦時下の言論抵抗として、菊竹六鼓、桐生悠々、石橋湛山、正木ひろしらのほかに、もう一人忘れてはならない人物がいる。

日露戦争の日本海海戦の小説『此一戦』を書き、大ベストセラー作家となり、その後、海軍軍人を退き、反戦・平和主義者となった水野広徳(一八七五 - 一九四五)である。戦前の歴史を振り返ってみても反軍・反戦のジャーナリストは何人かいるが、海軍大佐まで登った人物が軍服を脱ぎ、一八〇度転換して軍部批判をし、「日米は戦うべからず」「戦えば必ず敗れる」と訴えた例はない。

当時、日本で唯一といってよい反戦の将校である。水野は三十一歳のとき、水雷艇長として日本海海戦に参加、武勲をあげた。この時の体験や戦史編纂にたずさわった知識などをもとに戦記『此一戦』を一九一一年(明治四十四)年に刊行、一大ベストセラーになり海軍少佐(当時)水野広徳の名は一躍天下にとどろいた。この頃の水野は「一般軍人に通有なる盲目的軍国主義の信仰者」「侵略的帝国主義の讃美者」であったと自らを述懐している。

『此一戦』の冒頭の一節は「兵は凶器なり」であるが、最後の一句は「国大といえども、戦いを好む時は必ず滅び天下安しといえども戦いを忘れる時は必ず危うし」と結んでいる。その後の軍閥の行動と重ね合わせると、極めて暗示的な言葉である。

1…ベストセラー『此一戦』の印税で外遊

この頃、水野の文名は陸軍軍人で戦記作家として有名な桜井忠温と並び称され、意気ようの時代であった。

水野は軍国主義にこり固まっており、『此一戦』の印税収入などをもとに、私費で一九

一六(大正五)年、四十二歳の時、さらに三年後の二度にわたり、第一次大戦前後のヨーロッパを視察した。ドイツやフランスなどですさまじい近代戦の破壊力による都市の惨状や市民の苦しみ、悲劇をまのあたりにした水野は大きな衝撃を受け、思想的基盤を根底から揺り動かされ思想の大転換をきたした。

「その凶暴なる破壊、その残忍なる殺りくの跡をみて、満目唯荒涼、満心唯悲哀、僕は人道的良心より戦争を否認せざるを得なかった」と述べている。

木と紙でできた家屋が密集した日本の都市は、空襲には一番弱い。

こんど戦争が起こればドイツ以上の惨状になる。日露戦争は第一次大戦に比べれば、子どもの戦争ゴツコのようなもの。勝っておごった軍部は近代戦の恐ろしさを知らない。日本は戦うべからず、特に日米戦は絶対に避けなければ、日本は滅亡するのではなからうか。

こう考えた水野は、それまでの軍国主義者から一八〇度転換し、反戦平和主義者となった。

自らの軍人生活に良心の苛責を強く感じ悩んでいた水野は、一九二一(大正十)年正月、『東京日日新聞』(現『毎日新聞』)の依頼に応じて「軍人心理」を書いた。

大胆率直に自らの軍人心理を吐露したものだが、上官の許可を受けずに政治意見を表明したとして処分された。これが軍人をやめるきっかけとなった。「軍人心理」の内容はその後の水野の主張や満州事変以降の軍人の政治発言と比べると、ずいぶん微温的なものである。

しかし、当時は社会主義にかぶれた軍人の出現として話題を集めた。

水野は、軍隊の威力を保持するために神聖純潔なるデモクラチックな軍国主義を実現せよ、と訴えた。特に二つの点を主張した。軍隊のデモクラシー化(民主化)と、もう一つは軍人の参政権の要求であった。

2・軍国主義者から一八〇度転換し、反戦平和主義者へ

「現代の軍人は軍隊は政府の私兵に非ずして、国家の公兵であるとの自覚を有して居る。一政党の番兵に非ずして国民の護衛兵であるとの信念を持って居る。世界の文明国中今日尚お軍人の参政権を奪うが如き非デモクラシイの国はフランスとイタリ

アとそして我が大日本帝国のみである」(「軍人心理」)

昭和戦前期の言論抵抗で、軍閥が日本を滅ぼすことを的確に見抜き、日米戦うべからず、戦えば必ず放れる、と一貫して軍縮を訴えたジャーナリストは水野ただ一人といって過言でない。

ところが、水野への評価は、決して高くない。たとえば菊竹六鼓は 5・15 事件での言論批判で高く評価されており、桐生悠々もミニコミ誌『他山の石』に立てこもり孤立無援でたたかった執念への畏敬の念が大きいきらいがある。

その点では、軍閥や軍部の病根をきちんと押さえ、軍縮や近代戦への合理的な思考という点では水野のほうが、はるかにすぐれている。

思うに、水野が海軍出身の軍事評論家であり、菊竹や桐生のような生粋のジャーナリストではなかったこと、軍事一本の評論が一般受けしなかったことなどが理由で十分評価されていないのではなかろうか。

水野は、海軍軍人と訣別し、筆二重の評論家生活に入った一九二〇年(大正十)年以来、当時、日本の論壇の中心であった『中央公論』『改造』に毎月、軍縮論を執筆しキャンペーンを張った。『中央公論』をみると、

10

一九二一年十月	「華盛頓会議と軍備縮限」
二二年一月	「軍備縮少と国民思想」
三月	「陸軍縮少の可否と其の難関」
八月	「軍部大臣開放論」
十二月	「西伯利座の軍閥劇」
二三年 六月	「新国防方針の解剖」
二四年 六月	「戦争一家言」
二五年 四月	「米国海軍と日本」
二七年 八月	「軍縮会議論」
九月	「決裂したる軍縮会議」
三〇年 九月	「海軍お家騒動の総勘定」

以上は、軍縮などのタイトルのついたものなどを集めたものだが、『中央公論』だけみても一九二二年に十四本、二三年に十五本と毎月登場、軍部や軍縮について縦横無

尽のペンをふるった。

二五年は七本、二七年は四本と減ったものの、大正末から昭和の初めにかけて、水野は日本を代表する軍事評論家として油が乗り切った活躍をみせており、軍事や軍部についての詳細なカルテを精力的かつ正確に記録したといえるだろう。

比喩的にいえば、一九三二年の満州事変以降は軍部が対外侵略へと一挙に暴走した時期にあたるが、その原因は当然その前に兆候として現れており、水野はその潜伏期間にすでにその病状と原因を見破り、将来どんなにヒドイことになるかも予言し、何度も警告を発したのである。

3・日米戦えば日本は必ず敗れると主張

剣をペンに変えた水野は、冷静で大局的な判断に基づいた軍事評論を展開した。大正、昭和初期にかけて、ますます声高になるのは対英米強硬外交であり、右翼的なアジア主義であった。

一九二二年にワシントン軍縮条約が締結され、英米に対して七割の主力艦保有を主張していた日本海軍は六割で涙をのんだ。以後、これが国防問題の焦点となり、三〇年のロンドン軍縮会議で海軍の内部対立は決定的となった。ワシントン条約と並んで一九二四年五月に米国で排日移民法が可決され、反米感情が一挙に高まり、日米危機説がクローズアップされた。

こうした風潮にうまく乗り、『『圧迫された日本』（一九二二年刊）『日米戦争 日本は敗れず』（二四年刊）などを出版、日米撃措闕あり、アジア人のアジアを唱え、もし日米戦わば日本が必ず敗れる」と主張した軍事評論家・石丸藤太（一八八一 - 一九四二）らに対して、水野は真っ向から反対した。

一九二三年一月、加藤友三郎首相、上原勇作参謀総長らはアメリカを仮想敵国とする新国防方針を作成した。水野は『中央公論』（同年六月号）に「新国防方針の解剖」を書き、日米戦を徹底して分析した。次の戦争は空軍が主体となり、東京全市は一夜にして空襲で灰じんに帰す。戦争は長期戦と化し、国力、経済力の戦争となるため、日本は国家破産し敗北する以外にない - と予想、日米戦うべからずと警告した。

水野は「当局者として発狂せざる限り、英米両国を同時に仮想敵として国防方針を策立する如きことはあるまい」と指摘したが、太平洋戦争の約二十年前のこの予言は見事に的中したのである。

水野はワシントン条約を「有史以来の人間の為したる最も高尚なる、最も神聖なる大事業。日本財政の危機を救いたるもので……日本海軍の危機を救いたるもの」（『軍艦爆発と師団減少』 - 『中央公論』一九二四年十月号）と高く評価した。

また、日米の経済関係を重視して「日本は経済生活に於て米国に負うところ大なることを知って居る。日本潰すに大砲は要らぬ。米国娘が三年日本に綱をストライキすれば足る」（『米国海軍の大演習を中心にして』 - 『中央公論』一九二五年二月号）と日米協調不可欠を主張、次のように軍国主義者の威勢のいい態度を批判した。

「今の日本人中に無責任に放言的に、日米戦争を説く者は甚だ多い、彼等は太平洋を泳いで渡り、大和魂と剣付鉄砲さえあれば、ロッキー山を越え得ると思つて居るであらう。いやしくも、多少なりと日米の事情に通ぜる人間にして、日米戦争など本気で考える者は恐らく一人もあるまいと信ずる。

不幸にして我国には日米戦争煽動者が甚だ少なくない。軍人を中心とし、其の周囲に巢食う慢性愛国患者や憤慨常習病者等である。彼等は今尚お『敵国外患無ければ国危し』との侵略御免時代の常套語を金科玉条として、国民の元気を鼓舞する唯一の道は、対外敵愾心を煽るに在りと信じているらしい」

一九二四年一月、宇垣一成が陸軍大臣に就任。明治以来、増強の一途だった軍備に初めてメスを入れ、四個師団を廃止し、三万六千九百人の将兵、馬五千六百頭を削減、そのぶんを戦車、高射砲などの兵器や装備の近代化につとめた。これに陸軍は猛反対したが、国際、国内事情からすれば英断であった。

水野はこの陸軍軍縮を先頭になって唱えた。軍人が分を守り、シベリアン・コントロール下で行動するように一貫して主張した。軍縮に対して軍部が猛反対し、時の田中義一陸軍大臣が一兵をも減ずることに反対だ、と述べたことを指し「軍人がヤレー兵一馬を減ずるを許さずとか、ヤレ四個師団以上減少する能わずなどと頑張るは非立憲時代の通弊である」と次のように厳しく批判した。

「由来我国軍人は封建的因襲により国防を我物顔に振舞い、其の計画をまでも専断せるは大なる間違いである。借越である。国防はもともと国家の国防、国民の国防にして、断じて軍人の国防ではない。殊に国防は国家の重大なる政務であって、決して単なる軍務ではない」

国防計画を定むるものは国民の信任ある政治的識見高く、国際的眼界広く、経済的知識大なる人々でなければならぬ。いたずらに敵愾心のみ強き軍国主義、帝国主義の軍人のみに任すべきではない。軍人は寧ろ定められたる国防計画の範囲内に於て、作戦用兵のことを掌れば宜いのである」(「軍艦爆発と師団減少」)

4・軍国主義を厳しく批判

昭和の軍閥勃興で政府が軍部のいうがままに牛耳られる要因となった軍部大臣武官専任制についても、『中央公論』(一九二四年八月号)で「軍部大臣開放論」を書き、「軍部大臣武官制を廃止して、文武官の出身如何に拘らず、適材を任用せよ」と主張した。

また、このなかで、統帥権独立論にも反対、統帥権の独立をタテに「軍略の為に常に政略を犠牲に供する如きことあらば、往々戦争の大局を破壊し、国家に大害を生ずる虞がある」と批判、軍部武官制の問題点も「陸海軍人が武官大臣専任制の要塞内に立籠って、同盟拒任を為せば、如何なる人も内閣を組織、若くは維持することは不可能である」とズバリと指摘していた。

水野は軍部に抵抗し、軍部独走の原因の一つは軍部大臣武官制にあるとして、廃止論を唱え、シビリアン・コントロールの重要性を訴えていたのである。さらに一步すすんで、反戦・平和思想を思いきって述べた。『中央公論』(一九二四年六月号)の「戦争一家言」では軍部と軍人の好戦的な性向に大胆に異を唱えた。

「火薬は爆発の危険あるが故に、之を火気の無き場所に貯蔵せねばならぬ。軍人は好戦の危険があるが故に、之を政治の外に隔離せねばならぬ。軍人に政権を与うるは、恰も火鉢の傍に火薬を置くと同様に危険である。軍人は戦争を好むが故に、動もすれば総ての国家機関を戦争の目的に供せんとする。我等は軍人の好戦心を憂えない。唯、軍人をして政治上に権力を振らしむることを危険とする」

一九二四年秋、日本海軍は太平洋上で大規模な海上演習を実施した。米海軍もこれに呼応する形で大演習を行ない、高まりつつあった日米戦争の議論にいっそう油を注いだ形となった。両者の感情的対立を憂えた水野は、一九二五年二月号『中央公論』に「米国海軍の太平洋大演習を中心として」（日米両国民に告ぐ）を發表し、両国民がもっと冷静になり軍縮すべきことを提言した。

そして、日本は本来、軍国主義的な国民ではないが「大和魂己惚病と戦争慢心病の熱にうかされている」と指摘、日米双方の対立の原因は「相互の猫疑に基づく恐怖心と誤解に因る危惧心以外の何ものでもない」と分析。「演習を非難する声を以て、軍備の縮少撤廃を叫べよ。演習を心配する心を以て、戦争を恐れよ」と結論した。

また、マスコミや知識人の態度を「国際猜疑論者と対外興奮患者」と形容し、「無知の恐怖が国際猜疑心となり、疑心暗鬼をかきたて、対外興奮患者、国際神経衰弱病患者となる」と帝国主義者や軍国主義者を批判した。

こうした軍国主義者の 1 人の石丸藤太が、日米戦争は「双方の一大消耗戦となり、米国が敗れる」と結論したのに対し、水野も同じ前提で「日本が必ず敗れる」と正反対の結果を予想した。石丸が海軍力、その練度、精神力などの軍事的観点から分析したのに対して、水野は経済総力戦に陥り、国際的パワーポリティックスによる判断で的確に見通したのである。

必ず敗れる日米戦争へ一步一步押し流されている状況を憂えた水野は、軍縮と国際協調をことあるごとに述べたが、時代の大波はいかんともできなかった。

いっそうエスカレートした愛国主義、大和魂などの精神主義に対して、水野の合理主義、冷静な実証的態度はきわだった対照をみせた。

水野の憂国と危惧のとおり、軍閥は「発狂」したかのように暴走していったのである。

水野が『中央公論』や『改造』の主要雑誌に精力的に軍縮や軍部批判の論陣を張ったのは大正中ごろから昭和の初めだが、これ以外にも、友人で陸軍軍人から、軍事ジャーナリストになった松下芳男(1892 - 1983)にあてた書簡のなかで時局について憂える言葉を多数残している。松下は水野の死後、一九五〇年六月『水野広徳』(四

州社)を出版した。

ところで、水野が反軍のジャーナリスト・桐生悠々(1873 - 1941)の友人であったことはあまり知られていない。水野は同じ志をもち、国を憂い孤軍奮闘していた悠々を尊敬し、しばしば激励の手紙を出していた。

桐生悠々は水野より二歳年上だが、軍部批判をつづけ、近代戦の将来や日米戦争の結果を正確に予想していた点などでは二人は似ていた。

水野は悠々に「同病相憐れむ」と共感を寄せ、『他山の石』にもたびたび寄稿している。悠々が信濃毎日新聞に『関東防空大演習を噴う』(一九三三年八月十二日)を書き、『信濃毎日』を追われた際、水野にあいさつ状が送られてきた。(2)

5・反軍のジャーナリスト・桐生悠々を励ます

水野は悠々に返事を出し、次のような歌を託した。

君を慰む

軍部暴慢権柄を弄す
曲学阿世論を絶つ
悠々独り揮ふ侃諤の拳
莫哀天走れば天人に勝つ

『他山の石』がスタートして約一年経過した一九三五年六月二十日号に水野は「理解ある同情」を書いた。

「同病相憐れむというが、同じ体験を有する者にして初めて理解ある同情を表する資格がある」として、「暗夜における一筋の光明」に『他山の石』をたとえた。

「新聞雑誌が国家権力の前に雌伏追従せる今日、之に依って我等は国民の真の声を聞くことができない。独り国民の言ばかりでなく、此国に関する外人の声さえも聞くことを許されない。

此時に当り、悠々先生の『他山の石』のみは屢々我等の言わんと欲するところを言い、聞かんと欲するところを伝えて呉れる。誠に暗夜に一道の光明を見るの感があると共に、満腔の瓦斯を一時に奔放するの快を覚える。此意味に於て『他山の石』は、従って悠々先生は、我等に取って大なる存在である」

『他山の石』が孤塁を守り三周年を迎えた際、水野は再び筆を取り、『他山の石』はわずか三十頁の小雑誌だが、金玉の文字に満ちており、「時代の弊風を衝き、暴極の肺腑を決るものがある」と賞讃した。

水野は悠々の生き方に自分と同じものを見、さめて傍観者のになった自分と比べて、孤軍奮闘、発禁にも負けず権力批判をつづける悠々の執念に敬意を表していた。

「幾たびか官権の暴圧に遭って発禁又発禁しかも断乎として筆鋒を曲げず、敢然として所信に邁進する主幹悠々居士の気魄は、正に昭和文壇の一異彩であり、丈一偉観でもある。

操触界(著者注・新聞、雑誌界)を挙げて御時世の嵐に軟化去勢せられ、言論機関が萎磨沈衰せる今日、ひとり悠々居士が滑々たる濁流の外に起立し『他山の石』の孤塁に嬰って苦戦奮闘せる姿は寧ろ悲壮そのものである」(一九三七年六月五日号)

しかし、軍部の独走はとどまるところを知らず、水野は一層諦観し、傍観者と化した。日中戦争がますますドロ沼化していく一九三八年十一月五日号『他山の石』に「偶感」と題して次の歌を発表した。

この国に筆をとる人は幾万千
誠の筆は唯君に見る
銃執りて戦ふことは強けれと
筆の力の弱き国たみ

行きつくところまで行かねば軍部、国民も目を覚ますまいと、ついに敗北こそ再生の道と諦観した水野は滅びゆく国の姿を凝視した。

『他山の石』(一九三九年四月二十日号)で、「騒がしのこの世や」と題して、時局感を述べている。

海軍時代に航海術の大家から、「濃霧で方向がわからなくなったら一八〇度転針して引返せ」と教わったことを例に出し、「(これは)航海の極意であるばかりでなく、国策運用の要訣でもあると思います。だが、極めて乏しき体験よりするも、此の最も容易な

るべき策を執行するには自我を超越したる最も大なる勇断を必要とします」と、日中戦争のドロ沼に陥った政治、軍事状況を批判した。

『他山の石』に載った短文には、水野の鋭い洞察力と卓見が随所にあらわれている。

事変を水野がどうみていたのか。雑誌や新聞に発表されたものではないが、松下芳男にあてた手紙の中で、こう所感を述べている。満州事変を引き起こした陸軍の満蒙強硬論に対して、水野は「軍閥国を亡ぼす」といち早く予見し、警告していた。

「(陸軍が)満蒙に対する国家の国策にまで容喙どころか、国策まで彼等の軍国思想によって指導せんとするのは越権増長の至りです。……支那の兵備は其の本質に於て烏合の衆であって、其の数は如何に多くとも恐るるに足らぬとは言え、満蒙問題は兵力を以て到底解決し得ざる事、従って若し陸軍が満蒙合併の為に現兵力を要するという腹があるならば極めて危険で、且つ無謀であると信ずる」(3)(一九三一年七月二十日付)

この二ヵ月後に満州事変は起きた。水野は公には所信を発表していないが、満州事変、国際連盟への提訴など急雲告げた時局に対して、一九三二年二月五日付の松下への書信で、いささかヤケ気味だがこう述べた。

「連盟も駄目、軍縮も駄目、世界は軍国主義の昔に返って、何れかが倒れる迄軍備の競争を行い、日米戦争もやるべし、日英戦争もやるべしです。日本国民は今一度現代戦争の洗礼を受けねば平和への目は覚めません」(4)

一九三二年十月、水野は日米戦争仮想物語の『興亡の此一戦』(東海書院)を刊行したが、東京の大空襲、大災害をリアルに描き、日本の敗北と日米戦うべからずをにおわせたものであったが、ただちに発禁となった。この時の水野の歌 -。

言論の自由なき世は鳥羽玉の
心の暗のひとやとぞ思ふ

国を憂ひ世を慨くとて何かせん
唯成る様に成れよとぞ思ふ

「今の軍当局は国民に戦争の惨状や悲哀を知らず事を非常にいやがって居る様です。要するに無知の国民を煽って塑壕の埋め草にする積りらしいのです。平和に対する国民の言論を一切封禁して置きながら、荒木(貞夫)等が平和提議を世界に為すなどと言うに至っては全く臍茶の至りです」(一九三三年十月三十一日付)

一九三二年八月二十五日、水野は「極東平和友の会」の創立総会に出席したが、右翼の妨害にあい途中で中止となった。

このてんまつを書いた『僕の平和運動に就いて』という小冊子のなかで、水野は「日本は今世界の四面楚歌裡に在る。いずれの国と戦争を開くとも、結局全世界を相手の戦争にまで発展せずには止まないと信ずる。

日本の陸海軍が如何に精鋭でも、日本の軍部の鼻息が如何に強烈でも、全世界相手の戦争の結果が何であるかは想像に難くない。

僕が平和を唱うる真意は其処に在る。世に平和主義者を以て、意気地なしの腰抜と罵るものがある。テロ横行の今の日本に於て、意気地なくして平和主義者を唱え得るであろうか」(6)

この文章の最後には「悠々子知己を百年の後に待ち」の句が添えてあった。

時局の悪化のなかで、水野は「筆を折って、言論界から退く」と松下への書信に述べている。発表する場もますます少なくなり、書きたいことが書けず憂国慨世と言わざるをえない痛憤の気持を松下への書信に託した。

一九三四、五年の陸軍パンフレット事件、三月事件、十月事件や天皇機関説、国体明徴声明、永田鉄山暗殺事件など軍部内の抗争が激化していく過程でも、水野は的確な見通しをもっていた。

「陸軍の朋党騒ぎが、どこまで発展することやら、前途は予測を許しません。もともと喧嘩相手が無くては日の暮せぬ連中ばかりだから、外部の相手が悉く屈服した今日、仲間喧嘩に花が咲くのは当然の成行で、之も軍隊教育の一つの現われでしょう。

結局は外戦になるか、内乱になるか、何うせ血で血を洗うまでは治まりますまい。国体明徴とかに対する軍部の執拗、唯々唾棄の外はありません。今の軍部のやり方は、

自家の門前に於てのみ吠ゆる瘦犬の醜態であります。寧ろ美濃部博士(7)の毅然たる態度と信念とに敬意を表します」(一九三五年十月一日付)

陸軍の皇道派と統制派の抗争が二・二大事件の内乱へと暴発することを予見していたのである。

書簡とはいえ、当時これだけズバリと見抜いた者はいない。水野の驚くべき卓見であった。

一九三七年初春、永野修身海相に対して『海軍の自主的態度を望む』という公開質問状を發表した。このなかでも、水野は自説を強調、海軍無条約の時代に海軍の拡張が国際的にどんな結果をもたらすか、説いた。

その一方で次のように言論弾圧を厳しく批判した。

6・・執筆禁止リストに

「近時我国に於ては言論の自由著しく拘束せられ、殊に軍事問題に関しては、当局の意に満たざる言論は直に反軍思想として弾圧される。

ぼう大な官営宣伝機関を持ちながら、言論に対して言論を以て争うことを得ず、官権を以て弾圧するが如きは卑怯であると共に明らかに反民思想である。

法律と暴力の圧迫の下に、国内の言論機関を窒息去勢して置きながら、反対の言を聞かざればとて、民心我に帰すと自惚れるならば、これは耳を掩うて鈴を盗むの類で己を欺くの甚だしきものである」(8)

そして永野に「外務省が国民からでさえ、その存在を疑われる今日、世界をして我國の平和国策を信用せしめるものは海軍大臣の外には無い」と自重を求めた。

一九四一年二月、内閣情報局は『中央公論』編集部に執筆禁止リストを示したが、このなかに、清沢例、馬場恒吾、横田喜三郎らとともに水野広徳の名前もあった。水野は、同誌の一九四〇年五月号を最後に登場していない。

水野は太平洋戦争が刻 - 刻敗北に向かうなかで、 - 九四三年十月から郷里の愛媛県越智郡津倉村の島に療養のために疎開。

四五年中ごろには敗北するとの見通しをもち戦争の終結を待ち望んでいた。しかし一

九四五年十月十八日同県今治市の病院で七十一歳で亡くなった。水野の後半生は、日本の軍閥の興亡とたたかい、次の一節を実践した稀有の生涯であった。

水野の墓は、愛媛県松山市の正宗寺にあり、そこに小さな歌碑が建てられている。
(9)

世にこびず人におもねらず我れは
我が正しいと思う道を進まん

戦争の時代と対峙した平和主義者・水野の生きざまを示した歌ではなかろうか。

引用参考文献

- (1) 『近代日本のジャーナリスト』 田中浩編 御茶の水書房一九八七年 1190 - 1191P
- (2) 「水野広徳の秘められた自伝」 太田雅夫 桃山学院大学紀要 一九七九年 42P
- (3) 『水野広徳』 松下芳男 四州社 一九五〇年 213P
- (4) 『同上』 214P
- (5) 『同上』 219P
- (6) 『同上』 226P
- (7) 『同上』 242P
- (8) 『同上』 249P
- (9) 『同上』 298P